

事業の背景・目的

一時個体数が激減したタンチョウは、地域における保護の取組や、国や北海道の施策等により、2021年度には野生個体1,489羽が確認されるまでに個体数は回復した。しかし近年では、特に越冬期において釧路地方に集中する傾向が顕著となり、給餌量調整等の生息地分散の促進に向けた取組がはじまった。国内最大の越冬地であり70年にわたり保護活動に取り組んできた鶴居村では、タンチョウをとりまく現状を踏まえた取組内容の変換が求められている。本事業では、鶴居村内におけるタンチョウの生息状況を把握するとともに地域との共生に向けた実施体制を確立し、具体的な取組を推進することで国の事業推進への寄与を目指すものである。

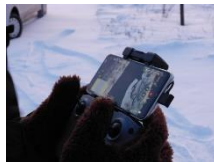
事業の内容

事業① 生息状況把握及び適正な越冬個体数検討事業

- ・環境省委託給餌場のタンチョウの飛来状況の把握
 - ・環境省委託給餌場を利用しない個体の生息状況の把握
 - ・ねぐら利用状況の把握
- これらのデータを元に鶴居村の適正な越冬個体数の設定に向けた考え方を整理し、適正な給餌手法を検討した



給餌場での飛来状況調査



ねぐら利用状況調査

事業② 普及啓発事業

- ・住民向けのタンチョウ講座（3回）
 - ・タンチョウ越冬分布調査への住民参加（延べ202名参加）
 - ・タンチョウ保護に貢献した住民への聞き取り調査（2名に実施）
 - ・専門家による聞き取り調査の手法に関する勉強会の実施
- これらの活動に参加した住民が中心となり飛来数調査や来訪者へのガイドを実施



聞き取り調査



来訪者へのガイド

得られた成果

生息状況調査については予定通り実施し、基礎データが収集できたが、適正な越冬個体数は検討継続中。適正な給餌手法の十分な試行もできなかったため、次年度以降も試行・評価を継続する。自然採食地となりうる不凍水域を把握したため、次年度以降は環境整備のあり方等を検討する。タンチョウ講座やタンチョウ越冬分布調査への住民参加を促し、これらを経て一部の住民有志が給餌場における飛来状況調査や来訪者対応を実施した。次年度以降も住民有志の活動を積極的に支援し、調査やガイドをするボランティアグループの確立を目指す。また、次年度からはタンチョウによる飼料作物への食害等の問題の解決に向け、実態把握や解決策の検討、さらには解決に向けた基盤を構築する。



今後の課題

酪農業の農場敷地内で家畜飼料の盗食や家畜への威嚇等の問題が発生しており、その防止対策が求められている